様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１６１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０２４８

研究課題名（和文）トマス・ハーディの短篇小説における近代性と語りの技法及び文体の研究

研究課題名（英文）A Study of Modernity, Narrative Techniques and Style in Thomas Hardy's Short Stories

研究代表者
宮崎　隆義（Miyazaki, Takayoshi）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：８０１５７６２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，モダニズムさらにポストモダニズムの観点から，イギリス19世紀の小説家・詩人であるトマス・ハーディの，特に短篇小説に秘められた実験的な傾向について，語りの技法の分析，さらに文体論の分析を行った。作品に見られる現代性を詳細に実証的に解明し，トマス・ハーディの創作の大きな割合を占めている短篇小説について新たな側面を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：This study puts focus on the analysis of narrative techniques of Thomas Hardy's short stories in terms of modernity and post-modernity. Hardy seems to have exploited newer techniques then prevailing at the time of his productive activities including short stories. His experimental employment of various narrative methods was in advance of the times and seems to be quite functional in the development of stories and in the aspects of narrative. This study has disclosed a new facet of Hardy's short stories, especially an element of comedy with elaborately constructed humour, which has long been apt be ignored or paid little attention to.

研究分野：人文学，英文学，比較文学

キーワード：トマス・ハーディ　短編小説　語りの技法　文体分析　モダニズム　ポストモダニズム　イメジャリ

１．研究開始当初の背景

研究代表者は，これまでに，ハーディの作品，特に長編小説について，時間と時間に関わる人間の意識，人間と他者との関係について作品分析を行ってきた。その過程で，登場人物たちが，過去を現在に内在化させており，そのために，その人物の過去と現在とが相対化され，その人物に関わる他者とのつながりにおいて二重性を帯びさせることとなり，それが悲劇性を生み出しているのではとの考えを持つに至った。その観点からハーディの長編小説すべてを分析し，その成果として平成20年2月に『トマス・ハーディ研究―時間意識と二重性の自己―』（青山社）として刊行することができた。その研究からさらに発展的に，作品のそれぞれの時間構造と技法的な側面，いわゆる語りの技法と，それに密接に関連している文体に目を向けることにより，これまでに着目した様々な点が，いかに言語の構造体である作品の表層に表れているかが実証的に解明できるのではないかとの方向性を持つに至った。ハーディの，特に短篇小説に着目してみると，それぞれが小説技法の点で，当時の創作上の技法に敏感に反応しつつ実験的なほどの工夫がなされており，かなり複雑な様相を示している。特に，モダニズムの観点から眺めてみると，ハーディのそうした先駆的な面が解明できる可能性が見えてきた。本研究は，これまでの研究成果を発展させ，物語の構造，特に時間構造と語りの技法，そして文体論という面から，特に短篇小説作品の分析と体系化の枠組みを構築することを目指そうとした。ハーディの小説における語学的もしくは文体的な研究としては，方言の使われ方という点で，過去に廣岡英雄氏の研究が見受けられるが，それは本研究とは少し視点が異なる。詩に関しては，吉川道夫氏や森松健介氏らの言語学的なアプローチによる分析の労作が見られるが，小説に関する限りいまだ皆無に等しいと思われる。海外においては，ハーディの言語面を論じたものとして，ラルフ・エリオットやレイモンド・チャップマンらの労作があるが，いわゆる文体論としての研究とはなっていない。もちろんそうした先行研究が大きな示唆を与えてくれるが，それぞれ比較参照することによって，ハーディの小説作品の全体像を築く上で，独創的で，またハーディの研究者たちに対して有益な研究発展の基盤を提供できるものと思われる。モダニズムの観点から時間構造と語りの技法の分析，文体論の分析を行うことにより，20世紀のモダニズム文学との関連性，特にハーディの影響を受けたといわれるＤ．Ｈ．ロレンスやＪ．ファウルズ，そして谷崎潤一郎らとの影響関係も波及的に明確にできると思われる。本研究計画については，全体的な構想に関わり，以上のようなこれまで進めてきた研究と，ハーディの短編小説についての評価が今も充分になされていないことを背景的な事情として把握していた。

２．研究の目的

本研究の目的は，モダニズムの観点から，イギリス19世紀の小説家・詩人であるトマス・ハーディの，特に短篇小説に見られる実験的な傾向について，時間構造と語りの技法の分析，さらに文体論の分析を行うことにより，20世紀のモダニズム文学との関連性を考察し，作品に見られる現代性を詳細に実証的に解明することを目的とした。ハーディの特に短篇小説について，多様な語りの技法を分析し，その構造美学的な側面を，特に時間構造との関わりから，詳細に検討して体系化することを目指し，次のような具体的な研究計画を立てた。

(1)時間構造構築と語りの技法の解明

ハーディの特に短篇小説について，多様な語りの技法を分析し，その構造美学的な側面を，特に時間構造との関わりから，詳細に検討して体系化を目指すことを目的とした。

(2)モダニズムの観点から見た技法の分析

ハーディは，伝統的な語りを踏襲して創作しながらも，短篇小説においては一人称の「物語り」や日記体の作品など，より先端的で実験的な手法を試みている。本研究では，短篇小説の全作品について，作品の時間構造に目を向け，20世紀のモダニズム文学と比較しながらハーディが試みようとしたモダニズムの要素を見出して作品の構造を解明することを目的とした。

(3)文体論の立場からの分析と体系化

上記の(1)，(2)に関する分析には，それが言語表現としてどのように表れているかということが問題であり，それは，英語そのものの使い方，ハーディ特有の英語表現の問題となる。文体論の立場からの分析が，この場合有効になろう。ハーディの英語についての研究は，その多くが方言の使い方に焦点が当てられている。しかしながら，上記の時間に関わる小説の構造分析に絡めて個々の作品の文体を眺めることにより，語り，構成の方法，時間構造等の側面がそれぞれ有機的に関連しあって，有意な結果が生まれることが期待される。従って，文体論の立場から，ハーディの小説構造について体系化を行うことを目指すことを目的とした。

３．研究の方法

ハーディの長編小説については，これまで，時間の進展に応じて変容する人間の姿と，その進展によってすり替わりつなぎ替わる人間関係を，二重性の自己という視点において論考を重ね，それについては一応の区切りとして成果として研究書にまとめることができた。その成果が基となり，これまでの長年の研究によって生じた視野の拡大に応じて，新たな研究上の課題がいくつか生まれた。中でも特に，短篇小説作品の時間構造の分析，語りの技法，文体論の分析を,モダニズムの観点を加味しながら研究を進めてゆくことが有効であ

ろうと判断した。そこで，以下のような研究の計画及び方法を念頭に置いて研究を進めた。

(1)時間構造構築と語りの技法の解明

ハーディの小説は，建築家であったこともあり，その構成が建築的に均整のとれた緊密なものであるとの評価が一般に流布している。しかしながら，その構造を体系的実証的に詳細に検討したものはほとんど見受けられず，個々の作品研究の中において言及されていることが多い。そのため，小説の構造美学的な側面を，特にそれは時間構造に大きく関わってくるので，研究の方法として，詳細に分析し体系化を目指すこととした。

(2)モダニズムの観点から見た技法の分析

ハーディに限らないことではあるが，ハーディは，作品中に，ギリシア・ローマの神話から聖書，シェイクスピアやその他過去の作家，詩人の作品を，効果的に引用することによって重層的なイメージを作り出している。このことはモダニズムの作家にも特徴的に見られるものでもある。時間という問題に関して，そうした引用の言葉とそのシチュエイションを眺めてみると，過去を意識し，その上で，いわば時間上の断層として，現在と対比させていることがうかがわれる。従って，全作品を念頭に置いて，それらが小説の時間構造の構築にいかに関わっているかを解明することを目指し，方法としては分析を中心とした。

(3)文体論の立場からの分析と体系化

上記の(1)，(2)に関する分析には，それが表現としてテキストの上にどのように表れているかということが問題になる。それは，英語そのものの使い方，ハーディ特有の英語表現の問題となろう。いわゆる文体論の立場からの分析を行うこととした。ハーディの英語についての研究は若干見受けられるが，その多くが方言の使い方に焦点が当てられている。しかしながら，上記の構造分析に絡めて作品の文体を眺めれば，ハーディの小説の語り，構成の方法，時間構造等の側面がそれぞれ有機的に関連しあって，有意な結果が生まれることが期待される。従って，研究の方法として，文体論の立場から，総合的にまた鳥瞰的に，ハーディの短編小説について体系化を行うこととした。

以上の３項目を基本的な柱として，研究期間内に継続して行うことを基本とした。これまで異なった観点から論考している作品については，そのために，ハーディの作品についての研究書をさらに網羅的に手に入れ，入手困難でも参照可能なものについては，複写等によって資料として入手した。そのため，ハーディ関係の図書が充実している大学等に適宜調査旅行を行った。また，詩の作品との関わりも無視できないため，詩に関わる研究図書の購入とともに複写等も行った。さらに必要に応じて，資料の調査旅行を行い，論文・資料の収集に当たった。また，関係する学会に参加し情報収集を図った。

さらに，ハーディの作品についての，時間構造の分析，語りの技法，引用句等に関わるイメージ・象徴と時間構造構築との関係，文体の分析，さらにモダニズムの観点から眺めた研究である以上，それらに関わる物語論，作品構造論，また，引用に関わる過去の作家や詩人たちの作品，さらに文体論の研究資料や参考文献・図書を網羅的に当たってみる必要があるため，それらに関する図書，論文，資料を購入し，必要に応じて調査旅行を行った。さらにまた，本研究の今後の展望と展開としては，映画芸術との関連で，主に表現の方法から比較することにより，新たな視野が開ける可能性がある。従って，映画関係の資料，特に文学作品が脚色されて映画化されたものを中心に映像資料として収集し，今後の研究展開の基盤作りを行った。これは，ハーディの語りの技法が，映画の技法と非常に似通った部分があるためであり，その点について，現代の映画技術論や表現論を参照することにより，ハーディの技法を実証的に解明してゆくことを考えたためである。

４．研究成果

平成 22 年度については，本研究の実施計画に基づきながら，これまでの研究との継続性を念頭に置いて，成果としては主に論文の形で公表するとともに，研究基盤の整備を重点的に行った。成果としての論文は，これまでに継続してきたひとつのテーマに沿って，連載的な形で個別の作品を分析するとともに，研究計画に示した３つの柱，すなわち，(1)時間構造構築と語りの技法の解明，(2)モダニズムの観点から見た技法の分析，(3)文体論の立場からの分析と体系化，を作品の分析と論考に反映させることができた。取り上げた作品は，男女の根本的な繋がり，性を基盤とする結婚という形に関して，いわゆるハーディ的な皮肉と，重層的で豊かなイメージ，そしてインターテクスチュアルな側面を有していることを指摘しつつ，ハーディの実験的で野心的な試みについて考察を加えることができた。また，作品の分析と考察，特に「物語」についての認識と，小説の技法の分析が，教育現場にも十分に生かせることも示して，ハーディの作品が持つ潜在的な可能性を指摘することができた。こうした点では，これまで取り組んできたテーマを，研究実施計画に示した方向につなげて，ハーディの，これまであまり評価されていなかった短篇作品について，新たな知見を加え，同時に，新たな研究の可能性を示唆することができたと思われる。以下，具体的に成果の一端を示しておく。

(1)短編集『チャンドル婆さんとほかの物語および詩劇』に収められている「運命と青い外套」では，ちょっとした嫉妬心によるきまぐれと，それに伴う人間と人間との根源的な繋がりの変容に焦点を当てた。主人公たちが，嫉妬心を秘めながら，年齢の違いや境遇の違

いにも関わらずに自分の気持ちにそぐわない結婚を受け入れてゆく様を，男と女の繋がりのそのすり替わり，繋ぎ替わりの妙，そうしたものを「共感の通路」という枠組みの中で，また物語の技法の観点からも分析し論じた。特に，語り手と視点の移動が，喜劇的な内容の物語をいきいきとしたものにしているが，それがまた，奇妙な老人の燃え上がった恋心と女同士の嫉妬心と見栄の競い合いというものを，豊かなイメジャリと，シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を下敷きにしての皮肉な喜劇に仕上げていることが判明した。
(2)短編集『チャンドル婆さんとほかの物語および詩劇』に収められている「チャンドル婆さん」については，若い副牧師の聖職者としての義務の気持ちと熱い善意が，へんくつなチャンドル婆さんの心に届きながらも，副牧師の気持ちが次第にチャンドル婆さんを遠ざけてゆくものに変わってゆく皮肉な側面を，人間と人間との根源的な繋がりの変容に焦点を当てて分析した。キリスト教の根底にある善意と，それを受け入れる人間との関わり合い，そうした側面を心理描写の点から，また物語の技法の観点からも分析し論じた。特に，クライマックスとなっている副牧師の説教とチャドル婆さんの振る舞いの滑稽な場面は，状況の滑稽さとともに，副牧師の説教の内容と，括弧書きでいわば内的独白もしくは自由間接話法の手法として描かれた彼の内面の言葉とのギャップが，物語の技巧上も前衛的であり，同時に，そのユーモアが秀逸な皮肉にもなっていることが判明した。
(3)『変わりはてた男とほかの物語』に収められている「乳しぼり娘のロマンティックな冒険」について，その物語としての技法を論じた。いわゆるロマンチシズムの概念的なイメージが，タイトルにある「ロマンティック」との関わりでふんだんに見られると同時に，大枠の語り手を配しながら，登場人物たちが，それぞれ回想という形で自分たちの過去の出来事を語るという点に，ハーディの物語の技法に対する意識と現代の手法や技法に通ずる前衛的な側面が見られることが判明した。
(4)『変わりはてた男とほかの物語』に収められている「変わりはてた男」について，その物語としての技法を論じた。物語全体の大枠の語り手が物語を進めてゆくが，「物語り」の情報の担い手を，視点的人物として置きながら，その人物は身動きのできない不自由な人物という設定になっている。その人物から情報を得て，大枠の物語が物語られるのであるが，そうした設定によって，物語の情報というものが断片化され，さらに信頼性も不確かなものとなっている。こうした物語の設定と技法が，当時のリアリズムの流れからモダニズムの流れに至ってゆく中で，語り手の信頼性という問題に関わる，ハーディらしい前衛的な実験的な取り組みと見なすことができることが判明した。
(5)『ウェセックス物語』中の「惑える牧師」は，ハーディの短編小説の中でも特異なほどにユーモアに満ちている。
ハーディは，いわゆる悲劇的な作品を書き残している詩人・作家ではあるが，その作品が一貫して悲劇一色のトーンではないことに読者は容易に気づくことができる。初期の作品である『緑樹の陰で』は，そのタイトル自体がシェイクスピアの喜劇作品『お気に召すままに』の 2 幕 5 場のアーデンの森での歌から取られたものであって ，シェイクスピアの喜劇を意識していたということが明らかだが，その作品の世界は，牧歌的な農民世界のそこはかとないユーモアに充ちた世界になっている。ハーディの小説の創作活動の原点が，シェイクスピアの喜劇やロマンス劇を意識した喜劇的な要素を含むものであった事自体再検討の必要があるが，そうした傾向が，実はハーディの以降の作品に脈々と見え隠れしながら受け継がれており，より悲劇的な色合いの強い作品においてもユーモラスな面がときおり見られ，それがむしろ悲劇性を高めていることがある。悲劇と喜劇とが観点を変えれば表裏一体的なものであることを考えれば，ハーディの悲劇作品に見られる喜劇的な要素がこれまであまり注目されてこなかったのは不思議でもあり，ハーディ作品に見られるユーモア性というものに目を向けることで，ハーディの新たな側面が浮かび上がる可能性がある。特に，ユーモア性については，言語表現が持つ幾層もの意味のレベルと状況，さらに発話であれば発話者とその発話を受取る側との認識力や理解力の微妙なずれが，そのユーモアの生命線となる。それを伝える側，語り手と，視点や語りの技法，そして，受け取る読み手の認識力，知性の総体も試されるという非常に高度で知的な相互作業が行われるのがユーモアというものであろうが，この作品では，ハーディのユーモアというものについて，新たな側面を見出すことが出来た。
(6)『ウェセックス物語』に収められた「羊飼いが見たもの」は，ハーディの語りの技法が如実に現れている。過去の人物に語らせながら，信憑性を保証しないという，語り手の信頼性の問題を含みつつ，主人公の視線の動きに合わせた描写と，少年の羊飼いの判断力，認識力というものと，全知の語り手が持つ情報と，読む側の判断力や認識力とのギャップの問題が，非常に巧みに描き込まれている。人物たちの会話などは，言葉の持つ多層の意味が読む者に対して知的な活動を促しているようにも思える。
(7)短編集『人生の小さな皮肉』に収められている「古びた人々」の第2話「従兄弟ハードカムの話」については，時間の問題と心理の変容，そしてそれに伴う人間と人間との根源的な繋がりの変容をうかがうことができる。主人公たちが，気まぐれに婚約者を入れ替えて

結婚するという状況において，男と女の繋がりのそのすり替わり，繋ぎ替わりの妙，そうしたものを時間の問題の観点から，また特に物語の技法の観点から分析した。物語論の立場から，語りの技法と物語の時間操作について分析したことにより，この作品の評価についてひとつの方向性を示すことができたと同時に，英語教育の現場で，こうした読み方を活用することができないかを示唆することもできた。論文集に収められた論考として，著書の形で公表することができた。
(8)ハーディの数ある作品の中でも，非常に技法が工夫されている短編「羊飼いが見たもの」について，物語論の立場から，視線と語りの技法について論じ，この作品の評価についてひとつの方向性を示しながら，トマス・ハーディの短編の面白さと現代性に満ちた技巧について示唆することができた。論文集に収められた論考として，著書の形で公表することができた。
　以上の研究論文並びに著書による公刊によって，本研究計画については一定の成果をあげることができると思われる。ハーディが取り組んだ創作の技法は，20 世紀の小説や映画芸術に見られる技法に近いものであり，ハーディがいかに先駆的に小説の技法を意識して創作していたかがうかがえる。また，語りの技法的な面ばかりでなく，扱われているテーマについても，人間の意識に深く入りこんだものとなっており，この点でもハーディの短編小説のいくつかが極めて近代的で現代的な側面を持っているかを知ることができる。さらにまた，この作品を含め他の短編小説がそれぞれ扱っているハーディらしいテーマに，思いがけず優れたユーモアが込められていることが判明した。長編小説にもそうした面はうかがえるが，短編という緊密した構成に，語りの技法と相俟って極めて高度な文体的な修辞としてユーモアが織り込まれていることが判明してきた。こうした新たな側面についてさらに多角的な視点から眺めることについては，参加した様々な学会での，より関連性が低いと思われる研究発表やシンポジウムから大きなヒントや刺激を受けたものであり，現在扱っている短編小説の分析にも反映できるものと考えている。また，ハーディの短編小説について，新たにユーモア性ということで，これまで文学史の中で定着しているハーディ観を修正することのできる要素を見出し，現在その観点で作品を見直している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
１．宮崎　隆義
「ハーディのユーモア ：「惑える牧師」の言語表現(1)」
徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.22, 1-17頁, 2014年.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/metadata/106384
査読無

２．宮崎　隆義
「‘A Changed Man’の語り手と物語の技巧」
徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.21, 23-36頁, 2013年.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/metadata/106214
査読無

３．宮崎　隆義
「‘The Romantic Adventures of a Milkmaid’における語りの技巧について」
徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.20, 1-14頁, 2012年.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/metadata/104995
査読無

４．宮崎　隆義
「‘Old Mrs Chundle’における善意の問題―語りの技法と心理描写―」
徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.19, 1-13頁, 2011年.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/metadata/84981
査読無

５．宮崎　隆義
「不釣り合いな結婚の生態(8):「運命と青い外套」の場合―「共感の通路」を求めて―」
徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.18, 1-15頁, 2010年.
http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/metadata/75681
査読無

〔図書〕（計２件）
１．宮崎　隆義，大榎　茂行，森松　健介，他
「視線と語りの方法:トマス・ハーディの「羊飼いが見たもの」」
『イギリス文学のランドマーク―大榎茂行教授喜寿記念論文集―』
大阪, 大阪教育図書, 2011年11月, 364頁, 225-233頁。

２．宮崎　隆義，小迫　勝，瀬田　幸人，福永　信哲，他
「英語教育における「物語」の活用例として―「物語」の意味付けとハーディの短篇分析例―」
『英語教育への新たな挑戦―英語教師の視点から―』
東京, 英宝社, 2010年7月, 287頁, 158-170頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
宮崎　隆義（Miyazaki, Takayoshi）
徳島大学
大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス
研究部
教授
研究者番号：80157627